

報道機関 各位

熊本大学

青年期の北里柴三郎に関する重要史料を発見

(ポイント)

- 世界的な細菌学者である北里柴三郎きたさとしばさぶろう（1853-1931）が、青年期に小国郷（現阿蘇郡小国町・南小国町）の教師と役所の見習に採用されていたことを示す記録（辞令の控え）が、小国町教育委員会所蔵の「小国町町政史料」から発見されました。
- この新出史料は、柴三郎の履歴の空白部分を埋めるとともに、当時は軍人を志望していた柴三郎に、医学の道へ進路変更する人生の転機をもたらしたものであるとして、重要な意味をもつと考えられます。

(概要説明)

熊本大学永青文庫研究センターの今村直樹准教授と小国町教育委員会は、当時17歳であった北里柴三郎が、明治3年8月に小国郷の教師と役所の見習に採用されたことを示す辞令（控え）を発見しました。これは、当時の柴三郎の進路に地元の教師が想定されていたことを明らかにするとともに、のちに彼に医学の道へ進路変更する転機をもたらした人物やすだたいぞう（安田退三）との出会いを意味する、重要な史料と考えられます。

(記者発表について)

本研究成果について、Zoomを利用して詳細を説明する機会を以下のとおり設けます。参加を希望される場合は、熊本大学総務部総務課広報戦略室まで、メール（sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp）でご所属とお名前をご連絡ください。折り返し詳細をご連絡いたします。

〈日時〉令和4年5月27日（金）10:00～11:00

※恐れ入りますが、準備の都合上、5月26日（木）17:00までにご連絡いただきますようお願いいたします。

(説明)

[背景]

のちに世界的な細菌学者となる北里柴三郎は、嘉永5年12月20日（1853年1月29日）、阿蘇郡小国郷の村庄屋の長男として生まれました。青年期、軍人を志望していた彼は、明治2年（1869）12月に熊本藩の藩校^{じしゅうかん}時習館に入寮し、翌3年7月に時習館が廃止されると小国にいったん帰郷します。その後、翌4年2月に同藩が新設した西洋医学所^{せいよういがくしよ}（古城医学学校^{ふるしろいがっこう}*）に入学し、そこでオランダ人医師マンスフェルトの指導を受け、医学を本格的に志したことが一般的に知られています。

他方、柴三郎の最も古い伝記である宮島幹之助編『北里柴三郎伝』（北里研究所、1932年）には、時習館廃止後に彼が帰郷した際、両親や親戚たちが地元の教師になるように強く勧めたこと、また、その後の数か月間、彼は小国郷の行政担当者であった熊本藩士安田退三の家に書生として寄宿し、安田夫妻の薫陶を受けたことで軍人志望を捨て、医学校に入学することになったエピソードが記されています。しかし、時習館廃止後から医学校入学までの柴三郎の動向を示す史料は極めて少なく、上述した両親たちの勧めや、安田との関係についても、史料上では未確認のままでした。

[研究の内容]

今回発見された辞令は、江戸時代後期から昭和期にかけての小国町域の行政史料群「小国町町政史料」における、「明治二年 選挙一卷」という冊子から発見されたものです。「明治二年 選挙一卷」は、明治2年から同5年3月までの小国郷における人事関係記録をまとめたもので、役人・神官・僧侶などの任免や、それに係る関係書類が収録されています。

辞令は、時習館の廃止後、柴三郎が帰郷していた明治3年8月26日付のもので、その内容は、芝（柴）三郎を、小国郷の^{きょうどうし}「教導師」であった鈴木諫太郎の後任とともに、「大属小国詰所^{だいろくおぐにつめしよ}」の見習いに採用し、出勤中は飯米を支給するというものです。「教導師」とは、江戸時代から小国郷^{みやのはる}宮原にあった郷校^{ごうこう}「筑紫学舎^{ちくしがくしゃ}」の教員をさし、「大属小国詰所」とは、熊本藩領であった豊後国久住と小国を管轄した行政担当者（郡政大属^{ぐんせいだいろく}）の小国出張所を意味しています。当時、小国・久住の郡政大属を務めていたのが、前述の安田退三でした。

以下、新発見の柴三郎宛辞令の解説文と現代語訳です。

【解説文】

北里芝三郎

其方儀、小国郷教導師鈴木諫太郎跡教方持継、且大属小国詰所見習として召仕候ニ付、出勤中飯米被渡下候事、

明治三年

八月廿六日

【現代語訳】

北里芝三郎

其方を、小国郷の教導師である鈴木諫太郎の後任として、かつ大属小国詰所の見習として採用する。出勤中は飯米を支給する。

明治三年

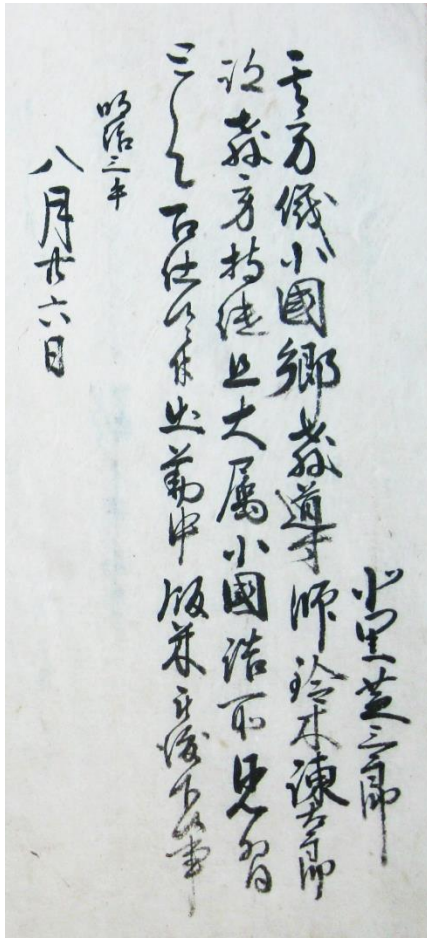
八月二十六日

[意義]

- 1、明治3年7月の時習館廃止後から、明治4年2月の医学校入学までの柴三郎の動向を示す史料は極めて少なく、前掲『北里柴三郎伝』に記述があるものの、同書では出典が明記されていないため、その真偽を確認することができませんでした。しかし、今回の新発見史料により、空白となっていた明治3年の柴三郎の履歴が埋まるとともに、『北里柴三郎伝』の記述に一定の信頼性が置けることが明らかになりました。
- 2、前掲『北里柴三郎伝』によれば、時習館の廃止後、帰郷した柴三郎に対して、両親や親戚は、長男であるがゆえに地元に残り、教師となるように勧めたと記されています。今回の発見は、実際に柴三郎が教師に採用された事実を明らかにするとともに、その採用に両親や親戚たちが関わっていた可能性を示唆するものです。また、当時の柴三郎の進路に、地元の教師が想定されていた事実が解明された点も重要です。
- 3、前掲『北里柴三郎伝』によれば、柴三郎が軍人志望を捨て、医学校に入学することになったのは、安田退三の影響が大きいとされています。今回の発見は、小国における柴三郎と安田との出会いを裏付けるとともに、世界的な細菌学者となった柴三郎の人生の転機を示す重要な史料として、注目されるべきものです。

[用語解説]

※ 古城医学校…熊本県最初の西洋医学校。熊本洋学校と並んで、古城（現熊本県立第一高等学校）の地にあった。明治3年10月に開院式をあげ、翌4年1月に生徒募集を行った。オランダ海軍の軍医であったマンズフェルトたちが教師となり、北里柴三郎、緒方正規、濱田玄達など、後の日本医学界を担う人びとを輩出した。



(左)北里柴(芝)三郎辞令控

(「明治二年 選挙一卷」小国町教育委員会所蔵)

(下)古城医学校時代の職員及び生徒

(写真提供:学校法人北里研究所北里柴三郎記念室)

中央の外国人教師がマンسفエルト、その向かって左が北里。

※無断で転載・転用・複写・複製を禁ずる。



***永青文庫研究センター**

熊本大学には、「永青文庫細川家資料」（約 58,000 点）や細川家の第一家老の文書「松井家文書」（約 36,000 点）の他、家臣家や庄屋層の文書群計 10 万点あまりが寄託・所蔵されており、永青文庫研究センターではこれらの資料群について調査分析を行っています。

【お問い合わせ先】

熊本大学永青文庫研究センター

担当：（准教授）今村 直樹

電話：096-342-2304

e-mail：eiseiken✉kumamoto-u.ac.jp